

中止とした。また、計 5 回の血液透析、利尿薬、ドパミン等にて急性腎不全は軽快した。

急性心筋梗塞回復後急性腎不全となった片腎患者の一例として、報告する。

II. 特別講演

「救急・集中治療領域での急性血液浄化法」

和歌山県立医科大学救急集中治療部助手

中 敏 夫

第 257 回新潟外科集談会

日 時 2003 年 12 月 6 日 (土)
午後 1 時 00 分～午後 4 時 41 分
会 場 新潟大学医学部
有壬記念館

一 般 演 題

1 熱傷による外傷性食道破裂の 1 例

澤田 成朗・草間 昭夫・長倉 成憲
多々 孝・島影 尚弘・内田 克之
岡村 直孝・田島 健三

長岡赤十字病院外科

症例は 53 歳男性。工作中、アルミニウムと水の混合による爆発にて受傷。気道熱傷を合併した顔面を含む受傷面積約 3 % の熱傷にて近医入院。受傷後 3 日目、胸痛、縦隔気腫あり当院に搬送。CT、食道造影にて食道破裂の診断。緊急手術（胃管による食道再建、右開胸食道切除、両側胸腔ドレナージ）施行した。受傷機転は受傷直後の画像より熱せられたアルミニウム片の誤飲による胸部上部食道の傷害と考えられた。

2 肝硬変併存胃癌に対する胃切除例の実態と予後について

池田 義之・大橋 学・内藤 哲也
中川 悟・神田 達夫・鈴木 力*
畠山 勝義

新潟大学大学院消化器・一般外科
新潟大学医学部保健学科*

肝硬変併存胃癌に対する胃切除例 21 例（平均年齢 65.5 歳）を対象に、その臨床病理学的背景及び予後につき検討した。胃癌進行度は、早期癌 15 例、進行癌 6 例で、肝硬変病期（Child 分類）は、A が 13 例、B が 6 例、C が 2 例であった。術中出血量が多く（平均 935ml）、高率に輸血を要し（MAP 9 例、FFP 16 例で使用）、合併症の発生率も高く（肝不全 3 例、敗血症 1 例、縫合不全 1 例、肺炎 1 例、また胸水・腹水貯留は 6 例）、長期の在院期間を要し（術後平均 31.2 日）、ICG - 15 分値 25 % 以上では合併症が高率に発生し、肝癌死、肝不全死、他病死のため予後は不良であった（5 生率 52.4 %、早期癌例では 61.9 %）。

3 胃全摘後空腸パウチダブルトラクト再建

河内 保之・永橋 昌幸・牧野 成人
西村 淳・新国 恵也・清水 武昭

長岡中央総合病院外科

【目的】術後 QOL 向上をめざし、平成 13 年 5 月より胃全摘後の再建法として空腸パウチダブルトラクト（以下 PDT 法）を採用した。その手術成績および術後早期成績を検討する。

【対象】平成 15 年 9 月までに行った 57 例の手術成績を従来行っていた R-Y 法（84 例）と比較検討する。術後 1 年以上経過した 28 例の術後早期成績を R-Y 法（33 例）と比較検討する。

【結果】PDT 法の手術時間は R-Y 法に比べ平均 16 分延長した。出血量に差はなかった。全体の術後合併症に差はなかったが、再建に関する合併症は PDT 法で少なかった。術後 1 年経過症例の体重増加は PDT 法で良好であった。

【考察】PDT 法は手術が多少煩雑であるが、合併症の増加はなく、術後早期の体重増加が良好で